

# 「チーム学校」から抜け落ちているもの

高教組委員長

竹島久美

「チーム学校」という言葉  
を最近見ることが多くなりま  
した。

自民党の教育再生実行本部  
提言、文科省中央教育審議会  
答申、高知県の教育等の振興  
に関する施策の大綱案・第二  
期教育振興基本計画案など、  
それぞれ強調しているところ  
は違いがありますが、共通し  
ているのは、学校を、外部の  
専門家（スクールソーシャル  
ワーカーなど）や地域の人材  
の力を活用した「チーム」と  
することです。そうすること  
によって、教員が子どもと向  
き合う時間を増やすのだそう  
です。

しかし、教員がきちっとか  
かわらなければ十分な効果は  
上がらないと思われず、  
連絡・調整の時間も必要です。  
生徒に向き合う時間を増やす  
というのであれば、一学級の  
生徒数を減らし、持ち時間数  
を減らして、根本的に人を増  
やさなければできない話です。  
中教審答申では「教職員定数  
の拡充」の必要性を指摘して

いますが、高知県の「大綱」  
案や「教育振興計画」案では、  
病休者のあいつぐような教職  
員の事態にはふれず、たくさ  
んの施策や数値目標が並んで  
います。一定の配慮も見えな  
いこともありませんが、無理  
を重ねている現場の教職員に、  
これ以上に無理を重ねるとい  
うことでしょうか。

チームとして「組織的に」  
という面では、高知県のもの  
は、教員同士が学び合うとい  
うところが強調されています  
が、自民党のものなどは、校  
長のリーダーシップが強調さ  
れ、他の教職員はまるで言う  
ことを聞いていなければよいとい  
わんばかりで、チームの中か  
ら、教職員や生徒はすっぽり  
抜け落ちていくかのようです。

「チーム」として教育にあ  
たるのは当然のことですし、  
これまでもやってきたことで  
す。私たちはどのような学校  
像を目指すのか、議論が必要  
です。



今の高校現場の状況をもっと詳  
しく知りたいとの要望があり、  
各校から生の声を聞ける学習会  
を計画しましたが開催できませ  
んでした。そこで誌面に各校  
の実情を順次掲載します。

## 高知江の口養護学 校高知大学医学部 附属病院分校

酒井 賀世

私が現在勤務する学校は、  
「高知江の口養護学校高知大  
学医学部附属病院分校」です。  
昭和58年から、当時の高知医  
科大学医学部附属病院入院中  
の児童生徒の教育に、高知江  
の口養護学校が訪問教育とし  
て当たることになりました。  
その後、平成10年に分校とし  
て開校しました。大学の統合  
により平成15年度より現在の  
校名になっています。

学校の場所は、非常にわか  
りにくく、附属病院の第一病  
棟の7階東の端にあります。  
元6人部屋だった病室（と言っ  
ても広くなくて現在他の階で  
は改装して4人部屋になって  
いる。）を一つは職員室に、  
もう一つは部屋を仕切れるよ  
うにして第一教室（小学部）・  
第二教室（中学部）として使  
用しています。教室での授業  
の他に、主治医の許可により  
病室でも授業をしています。

私は、五年目の勤務になりま  
すが、児童生徒の転出入が激  
しく在籍も二人から十人と幅  
があります。教職員は、教頭  
一、教諭三、講師一、時間講  
師一（生徒増にもない11月  
より配置、ちなみに高退教の  
武田先生です。）本校よりの  
兼務教員七（週一〜八時間）  
です。二つの教室にパーテー  
ションを入れて仕切っても足  
りず廊下に机を出して授業  
をしたこともあります。教員  
としては、机に蛍光灯をつけ  
ているのを「取調室」のよう  
に思うのに、子どもたちは  
「アリエッティみたい」と喜  
んで学習します。

現在、赤十字病院の移転が  
話題になっています。県教委  
が昨年行った「検討委員会」  
では江の口養護本校の移転だ  
けを論議する予定だったので  
すが、各立場の委員からは  
「箱モノ」だけの問題でなく、  
教育の中心について意見が多  
く出されました。

管理職が赴任した時に、  
「分校は、県民や先輩方が築  
いてくれた教育権保障の砦で  
す。私は守るだけでなく強固  
にしていきたいです。」と宣言し  
ています。それが、「高教組」  
としてのプライドなのかもしれ  
ませんが、次回は、分校で  
の授業についてお知らせしま  
す。

## 「足元からの探求」

山下正寿

### ビキニ事件を追う 高校生たち

四万十川をいだし、黒潮のよせる  
幡多地域で育ってきた高校生たちが、  
1983年の夏に「幡多高校生ゼミナール」  
というサークルを結成した。

「足もとから平和と青春を見つめ  
よう」と地域の現代史を発掘しはじめ  
た。ごくふつうの地域のなかに現代史  
の証言者がおり、かけぬけた青春  
の足跡のあることを知った。

そして、1985年、広島・長崎の被  
爆40周年の年に地域の被爆者調査に  
とりこんでいた。この時、ビキニ水  
爆実験の被災漁船員を発見し、この  
巨大な事件にいどむこととなった。  
第五福竜丸をふくめ、のべ1000隻以  
上の被災船が太平洋沿岸の漁港にい  
たこと、そして被災漁船員たちが放  
射能障害で苦しんでいる実態に初め  
て光をあてた。

高校生たちは、高知の港を歩きは  
じめた。彼らは、よくノートをとっ  
た。一言も聞きもらすまいとする態  
度にうたれたように、漁民は語って  
くれた。高校生だから、この巨大な  
事件に光をあてることのできたのか  
もしれない。聞き取り調査の後、室  
戸の高校生は「地元、室戸でのビキ  
ニ調査は、毎日自分が登校している  
道の途中で行われたりして、日頃気  
にもとめていない所に、こんな大き  
な事実がかくされていたのかと驚か  
されました」と語った。

「放射能で死んだ者など、この  
町にはいない」——この厚い壁の  
後ろに、被災の事実を認めさせまい  
とする無言の圧力があつた。「ビキ  
ニ事件は今も生きている。過去の  
出来事だけではない」。高校生たちの  
調査は一軒一軒ねばり強くつづけら  
れた。一人一人の証言が、ビキニの  
海をよみがえらせた。光った海、立  
ち上がった雲、死の灰のこと——。  
そしてマグロ漁業のすさまじい労働  
の場面も記録化された。ビキニの海  
を語りながら、彼らはマグロ漁民の  
誇りをとりもどしていった。

幡多高校生ゼミナールの高校生た  
ちはビキニ事件の社会的背景、水爆  
実験と放射能など「知りたいから学  
ぶ」本物の学習を積み重ねて、後輩  
へと引き継いでいった。「学び、調  
査し、表現する」活動は、幡多地域  
から室戸、東京（第五福竜丸）、焼  
津、広島、長崎、沖縄、韓国へと  
「平和の旅」を軸に広がり、ドキュ  
メンタリー映画「ビキニの海は忘れ  
ない」など、社会に向けて澁刺とし  
た意見表明を続けた。

「地道で粘り強い活動」「ビキニ被災  
を広く捉え、訴えた」ことが評価  
され、2011年6月に第2回「焼津平和  
賞」を受賞した。福島原発被災の3ヵ  
月後であった。

「18歳選挙権」がようやく実現する  
ほど日本は青年の社会的教育の後進  
国である。自分で考え、自主的に参  
加する能力は、進路選択、社会参加  
の道を開く基礎的教養であることを  
あらためて考えてほしい。

今回から1年間、山下正寿さんの  
連載が始まります。ご期待下さい。